

教育センターだより

第23号



も く じ

10年の歩み	1
教 育 研 究 部	
経営研究室	2
教科研究室	2
教育相談研究室	2
教育工学研究室	2
科 学 技 術 研 究 部	
理科研究室	3
技術家庭研究室	3
郷土教育資料の紹介	3
研修員とテーマ紹介	4
刊行物紹介	5
随 時 研 修	5
告 知 版	6



昭和44年12月に設立され、翌45年4月から研究・研修・奉仕の活動を始めた教育センターは、本年度10年目を迎えることになりました。

この間、研究事業としては、所員の研究成果をまとめた「研究紀要」と、

研修員による各教科・領域の研究をまとめた「研修集録」が、第10集まで刊行され、その都度、各学校に配布して、校内研修等の参考に供してきました。

このほか、学習指導のための手びきや資料集も刊行していますので、その主なものを次に上げます。

- 複式学級をもつ小学校の経営
- 複式学級の学習指導
- 学校教育相談（1～4集）
- 登校拒否（その1～2）
- 郷土教育資料（ひらけゆく秋田、秋田のあゆみ）
- 野外観察の手びき（地学編、植物編）
- 理科実験観察カード（小学校1～7集、中学校1～6集）
- 技術・家庭科 施設・設備管理運営の手びき
- 授業研究（日常実践につながる授業分析）

教職員が参加する研修事業は、昭和45年発足以来、約30,000名が受講され、毎年、県内教職員の $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ ほ

どの参加を得て、日常の授業充実に手助けしています。

また、教職員や県民に対して、教育についての直接的な奉仕活動を実施していますが、子どもの問題に関して、保護者や教師が来所して行われた面接は、年間2,600回を超える状況です。

さらに、53年度からは、教育110番との愛称をもつ電話相談（TEL 33-0959、32-0831）を開設し、電話による教育相談に応ずるようになりました。

人間の成長の中で、10歳児は、その成長の分岐点にあたり、隠れている未来を暗示する時期で、種々の環境に接触してよく適応し、様々な反応を示す年齢であるといわれます。教育センターも10年目を迎え、未来の教育を展望しながら、年々重視されてきている教職員研修の充実に努めたいと考えています。

10 年 の 歩 み					
科学技術研究部長 松 田 幸 雄					

本年度の研究事業としては、「研究紀要」、「研修集録」の刊行を継続し、ほかに、複式学級の学習指導（算数編）、郷土教育資料（秋田とその諸地域編）、理科実験観察カード（小学校第8集）、授業研究（その2）等の刊行を予定しています。

また、研修講座は、107講座、約2,500名参加の計画で、時代の進展と学校現場の実情に即した内容となるよう検討し、「心豊かな人間を育てる学校の創造」を目指し、心を砕いている諸先生に、十分な手助けができることを念願しております。

新教育課程実施に即応した講座内容の充実を 各研究室の構想

ゆとりのある充実した学校を求めて

経営研究室

新しい学習指導要領の趣旨を生かす教育経営の方向に各学校の主体的な取り組みがみられる。当室で担当する学校経営、学年・学級経営、学校評価等の研修講座では、全県的なこのような動向を基盤に、より望ましい方向をさぐり、改善の方策について研修する。

新規採用教員を対象とする教職教養研修講座は、本年度から校種別にし、前後期を通じて、教職についての基本的内容をじっくり研修するよう計画している。

また、経験五年後の教員を対象とする教育方法研修講座は、学級経営、生徒指導、学習指導、教育研究の四分野をセットし、演習の機会を取り入れながらより専門的な研修を積むよう計画している。

さらに、事務職員も新規採用者と一般事務職員に分け経験に適合して研修できるようにしている。

なお「学校経営の改善に関する研究」の一環として本年度は、新しい学習指導要領の完全実施を目前にした小・中学校の実態を明らかにし、各校の教育課程編成上の創意工夫と、志向する方向を明らかにしたい。

学校現場に密着した講座と指導資料の作成

教科研究室

本年度は、来年度からの小・中学校における新教育課程の実施を目前にした移行措置の最終年次であることに留意した講座運営を重点目標としていきたい。

また、57年度実施の高校「現代社会」を内容とした社会科の研修講座を新設したのもこの方向に添ったものである。

新学習指導要領による学習指導のありかたを主題にして、国語、社会、算数・数学、音楽、図工・美術、英語の7教科の講座内容を充実していきたい。そのためにも、講義・講演・演習・実践提案・授業研究・研究協議などパライターに豊かな講座運営と現場指導に活用できる資料の作成を特に留意したい。

当室で作成委員とともに研究を継続し、その成果を刊行物として現場に提供するものに、へき地教育関係では「複式学級の学習指導 算数編」、社会科関係では、郷土教育資料としての「秋田とその諸地域編」があるが、ともに現場に密着した指導資料として作成することになっている。

「人間」としての教師

教育相談研究室

教師が「教師」でなくなったとき、初めて子供の喜びや悲しみが分る。成績の悪い子が、どうやって自分を慰め励ましているか、それが分るのは、「教師」でなく「人間」である。登校できない子に「登校しないと進級できないぞ」と言うのは「教師」である。登校できないで苦しんでいる子をじっと見守るのが「人間」である。

「生徒指導」「進路指導」「特殊教育」「幼児教育」が、当室の守備範囲。共通の目標は、「人間」としての目を養うこと。

相談室には、いろいろな型の「問題児」とその親がくる。「教師」の目で見たら、お説教しか出てこない。その後に残るのは勝ち誇った「教師」と失望の底に落された親子だけ。

「人間」の目を見たとき、この親子のもつ悲しさが映ってくる。何も言えずに「また来てくれますか」とだけ言うと、親子は「また来ます」と言って、必ずまた来る。ふっと嬉しくなってくる。

ひとりひとりに生き続ける基礎学力を求めて

教育工学研究室

新教育課程への移行が着実に推進されてきているが特に今回の改訂で人間性豊かな児童生徒の育成と共にひとりひとりに確かな基礎学力を身につけさせる学習指導が強くとりあげられてきている。

教育工学研究室では、これに応えるべく現行の学級構成形態の中で、ひとりひとりが確かな基礎学力を定着するための学習システム、および進度差に応じた学習指導法の開発の研究に取り組んでいる。また本年度から、教育工学基礎研修講座既受講者や地域の教育工学の指導的教員を対象にした教授・学習システム研修講座を新設し、児童生徒ひとりひとりに根ざした学習指導の強化を図ることにした。

また、教育工学に関する随時研修の申し込みが、各方面から年ごとに増し、教育工学が学習指導の改善に大きな役割りをもってきていることを強く感じている。このように、教育現場の要望に応えるべく、日々の研究をPlan→do→Seeのシステムにのせて進めている現在である。

身近な自然現象を通して魅力ある学習を

理 科 研 究 室

理科関係の研修講座は25講座であるが、昨年まで5月に実施していた女教員理科研修講座が、11月に変更になり、中学校、高等学校の理科教育現代化講座が理科教育講座に、小、中学校の理科教育講座が小・中合同理科研修講座と講座名がかわった。また、高等学校の新学習指導要領に対応して、高校理科I講座を新設した。

それぞれの講座については、受講された先生方からご意見やご希望をお寄せいただき、次年度の講座企画に役だてている。例えば野外観察、理科基礎、天体観測等の講座は昨年同様希望者対象の講座にする。研修期間の長い講座を前期と後期に分ける。地学の野外観察を2会場にし、できるだけ多く参加できるようにする。理科実習助手対象の講座を設けて、基礎技術の習得を目ざす、などが挙げられる。

なお、新学習指導要領で強調されている子供の身近にある現象を通して、無理のない学習を進めていこうという基本的な考え方に基づいて、講座にもサイダーや貝がらと塩酸から二酸化炭素を集め、それを使って二酸化炭素の性質を調べたり、身近な材料（わゴム、おもり、磁石等）を使って、動くおもちゃを製作し、その教材のねらいや、製作上の留意点について研修する内容なども取り入れている。

学習指導に役立つ講座をめざして

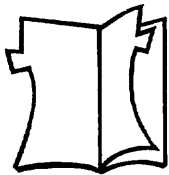
技術家庭研究室

当研究室で実施している研修講座のうち、小学校家庭科教育（3回）と高等学校家庭科教育（4回）は、今年度、3年計画の1年次で、今までと内容を変えている。小学校家庭科教育は、教育課程の移行期に当り、新学習指導要領に基づいた内容及び取り扱い方に重点をおいた。被服ではミシンについての実験・実習を各種組み入れ、製作学習が円滑に行えるように、食物では特にじゃがいもを中心に調理性に関する実験・実習を行い、調理実習の取り扱いが容易になるよう配慮した。高等学校の場合は、数年来希望のあったコース別にし、「家庭一般」と「専門科目」に分けた。主テーマは同じで、実験・実習の分野、掘り下げ方などを変える方法をとった。被服は被服材料に関して性能と衛生的特性面に分け、食物はでんぶんの調理性と食品衛生について取り上げている。

中学校技術・家庭科実技は3年計画の3年次で、内容等について来年度から新たにしたいと考えているので、先生方から率直なご意見やご希望をお寄せいただければ幸いである。技術・家庭科教材（希望講座）は、ふだん出来かねるような教材・教具等の製作をねらいとしたもので、先生方の参加を期待している。

随時研修には、研究会の支部等で来所、教具製作等行っているが、出来るだけ設備を利用いただきたい。

郷 土 教 育 資 料 の 紹 介



くらしや心の拠点としての郷土を見直そうという動きが活発になってきた。教育現場においても、郷土に根ざした特色ある学習指導が要請されており、県内の殆どどの市町村で副読本や地域資料が刊行されるようになった。

当教育センターでは、前身である教育研究所当時からのことに着目し、郷土教育資料として、「社会編」「産業技術編」「秋田県地誌編」等を刊行したのであるが、最近のものとしては次の2編がある。

- ・「地域開発編 ひらけゆく秋田」（昭和49年度）
変ぼうしつつある県内産業の実態や地域開発の動向をまとめたもの。
- ・「歴史編 秋田のあゆみ」（昭和51年度）
秋田県の歴史の発展を、日本史全体の流れと関連づけながら郷土の史料でたどろうとしたもの。

昨年度から、県内各地域の小・中学校教諭12名を作業員として、県内各地域の小・中学校教諭12名を作業員として、各地域の指導事例集で、次の3点を基本方針に編集する。①指導計画や指導案の事例（実践例を含む）を各地域、学校の個性を生かしたものにす。②資料収集や教材化の過程を具体的に分かりやすいものにす。③野外観察の指導事例を多く紹介する。なお、刊行物は今年度中に各学校、教育機関に配布する予定である。



→成委員に委嘱して「秋田とその諸地域編」の刊行を進めている。

小学校中学年と中学校地理的分野の身近な地

昭和54年度研修員とテーマ紹介

本年度の研修員として小・中学校から12名、県立学校から4名、計16名を迎えた。研修期間はこれまでと同じく、5月1日から9月30日までの5か月間である。

研修員はこの期間中、所員と同じく勤務し、分担研修（指定された教科、領域に基づく研修課題による研修）を中心にして共通研修（研修講座の受講、所外施設見学）等を行う。



〔入 所 風 景〕

行され配布される。

研修員と、その研修テーマは次の通りである。

分担研修の研修テーマは、各研究室ごとにテーマ検討会を行い、5月18日までにそれぞれ決定している。この後、研修経過報告会が7月中旬から下旬、研修成果報告会が9月20日(木)に行われる予定である。また、この研修成果は、「研修集録第11集」として今年中に刊

経営研究室

- 大館市立有浦小学校 教諭 成田 純一
学習意欲を高めるための学級づくり
—— 作文や日記指導を通して ——
- 湯沢市立湯沢北中学校 教諭 武石 克彦
学習意欲の向上と学級経営
—— 学級担任として果す役割 ——

教科研究室

- 阿仁町立大阿仁小学校 教諭 三杉 有三
材料・用具にかかわる基礎技術の指導
—— 紙の扱いを中心に ——
- 太田町立太田中学校 教諭 米川千栄子
「日本の音楽」の鑑賞指導について
—— 長唄「勸進帳」を中心に ——
- 県立由利高等学校 教諭 佐々木準次
英語の「聞きとり能力」獲得に関する一考察
—— 速読訓練を通して ——

教育相談研究室

- 鹿角市立八幡平中学校 教諭 小田島浩三
中学校における教育相談を通しての生徒指導のあり方について
—— 登校拒否の生徒の指導 ——
- 県立南養護学校 教諭 由利 正義
精神発達遅滞をともなった自閉的傾向児について

教育工学研究室

- 男鹿市立船川中学校 教諭 千釜 文夫
個を生かすための授業における評価活動（フィ

ードバック機能) のシステム化

—— 社会科地理的分野を通しての一考察 ——

理 科 研 究 室

- 秋田市立明德小学校 教諭 芳賀 龍平
小学校理科における製作が生きる学習指導について
—— 物理的内容を通して ——
- 横手市立金沢小学校 教諭 泉川 勝彦
小学校における「植物相互の関係」の指導
—— 資料収集と教材化 ——
- 能代市立東雲中学校 教諭 高橋 文夫
東雲地区に見られる地質教材の資料作成と活用
- 県立大館商業高等学校 教諭 神尾 怜子
生徒実験による分子量測定法について

技術家庭研究室

- 峰浜村立塙川中学校 教諭 渡部 国雄
木材加工学習における指導資料の作成
—— 接合を中心にして ——
- 井川町立井川中学校 教諭 石井 昭広
電気機器の仕組みを理解させるための工夫
—— 照明・電熱器具を中心に ——
- 南外村立南外中学校 教諭 高橋 孝芳
金属材料に関する指導資料の作成
- 県立二ツ井高等学校 教諭 遠藤 恭子
被服材料実験に関する学習資料の作成
—— 実験カードの試作 ——

◆自己の授業改善の方途をさぐる授業研究◆

昨年度は、授業研究を理論と実践の両面からさぐり「日常実践につながる授業分析」として刊行物にまとめ、学校での授業研究の資料として配布しました。

本年度は、昨年度の研究をさらに深め、自己改善につながる授業研究のあり方を学校現場の研究協力員の協力を得て、実践を通じた研究の積み上げをしながらすすめていく計画です。

なお、本年度の研究をまとめて、年度末に、刊行物として各校に配布する予定です。

各学校、各先生で、昨年度の授業研究1をご活用の節はご意見等お寄せください。

◆複式学級の学習指導 算数編◆

本県の複式学級の実情と担当教師の要望にこたえ、本年度は算数科の学習指導の効率化を図るため、その指導資料として算数編を作成することになった。内容としては、複式学級における算数科の学習指導上で当面の課題となっているものを取り上げ、新教育課程実施にともなう算数科学習指導上の課題、年間学習指導計画例、領域、学年別を配慮した学習展開例などを提示して、現場の実践にすぐに活用できるものにした。5月上旬作成委員会が発足し、年内刊行を目標にした活動が開始されている。

◆学習指導のソフトウェア件名目録第2集◆

学校教育の現場で、学習指導法の改善が着々と進められている現在、教育工学研究室では、昭和50年室および教育工学基礎研修講座開設以来、学習者に主体を置いた学習指導プログラムをはじめ、ソフトウェアの作成を研修内容として進めて来たが、約200件できたので、本年3月に件名目録第1集として刊行し配布した。現在まで既に多くのコピー依頼があり、送付している。本年度の第2集は、センターの資料だけでなく県内各校で開発されたソフトウェアも集録し、充実したものにしたいので、当教育工学研究室宛にご惠贈いただきたい。

◆小学校理科実験観察カード第8集◆

理科実験観察カード教材編第7集を、この3月県下各小学校に配布したが、理科研究室では今年度も引き続き第8集を刊行する予定でいる。

これまでのカードを使用してみた感想、意見などをどしどし寄せてほしい。又、日常の理科の授業で、こんなところがうまくいかない、何かいい工夫はないかとか、この分野の資料が手に入らない、何かいい情報はないかとかいったことがあったらお知らせ願いたい。そうした声をできるだけ生かして、重宝がられる実験観察カードの作成を図っている。

刊行物紹介

随 時 研 修

昭和53年度

当センターでは奉仕事業の一環として、外部からの要請に応え施設設備を開放して、県内の教育研究機関、あるいは教育研究団体や研究部会の行う教育研究、研修の充実促進を図る事業を随時研修と称し、宿泊棟の利用をも併せて研修の実施に協力しております。昭和53年度についての概略をあげてみますと、研修の件数が11件、延日数にして16日、対象人員は304名、延にして540名にいたっております。

その事業主体や研修内容を紹介いたしますと、大曲市理科センターの顕微鏡写真撮影の基礎技術実習。大曲市教育研究所の教育相談的授業分析と教育評価並びにスケーロプログラムの作成と利用。大館市・比内町・田代町三教委の指導法の改善と指導プログラムの作成。鹿角市教育センターの教育工学研修会。南秋技術家庭研究会の領域毎研修会。高等学校家庭科技術検定講習会などは毎年継続的に行われておりまして、年々盛会をきわめてきております。

そのほか秋田市中学校生徒指導協議会の教育相談の実際。河辺英語部会の一泊研修。本荘由利技術家庭研究会の家庭科住居領域に関する研修。さらには全県特別活動研究会の「ゆとりの時間と特別活動の実践」のあり方を主とした研修会などは新規のものとして行われましたが、新指導要領の実施と相まって、教員の資質の

向上が強調されている昨今、こうした自主的研修が多く行われることは、教育の将来にとって大きな原動力であり、期待があります。



学習指導プログラムを作成している先生方



人事異動

所員

〈転任〉

- 総務課長補佐 西島 昭男 県青年の家総務課長補佐へ
- 経営研究室長 今井 敏雄 大曲小教頭へ
- 教科研究室長 渡辺 昭次 河辺中教頭へ
- 指導主事 山本 象 六郷中教頭へ
- 〃 品川 大 義務教育課指導主事へ
- 〃 佐藤 悦郎 秋田西高教諭へ
- 〃 室田 弘 高校教育課指導主事へ
- 〃 横山 侑 秋田南高教諭へ
- 〃 中村 松夫 羽城中教諭へ
- 〃 藤原 裕之 秋田工高教諭へ
- 〃 船木 菊子 高清水中教諭へ

〈新任〉

- 総務課長補佐 宮原 茂 県青年の家総務課長補佐から
- 指導主事 鈴木 樹 大川西根小教頭から
- 〃 高橋富美雄 神宮寺小教諭から
- 〃 山田 芳男 湊城第二小教諭から
- 〃 藤田 幸雄 秋田高教諭から
- 〃 黒木 正之 六郷高教諭から
- 〃 鎌田 武美 男鹿高教諭から
- 〃 小玉 康夫 羽城中教諭から
- 〃 野口 晴子 山王中教諭から

〈所内〉

- 経営研究室長 長崎五十武 指導主事から
- 教科研究室長 佐々木 清 〃

研究員

〈転出〉

- 教育相談研究室 高井 慶蔵 角館中教諭へ

〈転入〉

- 教科研究室 飯泉 尚弘 湯沢南中教諭から
- 〃 成田 哲也 井川中教諭から
- 教育相談研究室 出川長五郎 鷹巢中教諭から

当センター図書資料室のご活用を

学校・教育関係機関のご協力で教育関係資料も年々充実の方向にあります。活用面でも昨年度は、貸出し物件 664件をかぞえました。県内の教育関係職員であればどなたでも利用できます。

(研究刊行物・記念誌・調査資料等のご寄贈を)

電話相談の利用状況

昨年6月から、毎週水曜日に、電話による教育相談を行っている。本年3月末までの利用状況は下のとおりである。本年度も利用を呼びかけていただきたい。

	学 習 進 路	身 体 言 語	情 緒	社 会 適 応	生 活 慣 習	計
幼	2	6	17	6	2	33
小	23	4	40	11	17	95
中	22	1	16	9	20	68
高	27		4	11	3	45
計	74	11	77	37	42	241

電話番号 0188(33)-0959・0188(32)-0831

全県児童・生徒理科研究発表大会のお知らせ

例年当センターを会場にして行われている理科研究発表大会は、本年度で第14回を迎え、11月7日小学校、同8日中学校、同9日高等学校と3日間にわたって開催されることになりました。

昨年度は、小学校58題、中学校34題、高等学校16題の研究発表が行われましたが、いずれも身近な自然の事物・現象に積極的にはたらきかけた立派な研究発表でした。

なお、本年度の大会開催要項は、7月上旬に発送する予定ですが、要項をご覧の上、多数ご参加下さるよう期待しています。

所員研究発表会

所員の年間の研究活動の成果を公開する標記の会が本年度は、教育センターを会場にして55年2月1日(金)に実施される。発表件数は、経営1、教科1、教育相談2、教育工学2、理科2、技術家庭1で、9名の指導主事、研究員による口頭発表がある。

本県の教育研究の交流を活発化させるためにも、現場から多数の参加者が来所されることを期待するとともに、関係各機関にその配慮方を願いたい。



新しい教育課程の実施に即応するため当教育センターの各研究室では、講座内容に検討を加え、学校運営や各教科、領域に資するように努めているが、本号ではその内容を集約して研究の便が図られるよう編集した。

教育センターだより 第23号

発行年月日 昭和54年6月10日
 編集発行者 秋田県教育センター
 秋田市仁井田緑町4番2号